

アカデミック・ライティングのための「坊っちゃん」分析

—問題設定までの過程に焦点化して—

宮本愛瑛子・跡上 史郎

Analyses of *Botchan* for academic writing:

Focused on processes for devising questions about the text

Aiko Miyamoto, Shiroh Atogami

(Received September 29, 2017)

1. 序論

稿者の一人、宮本は、渡邊淳子の指導の下、旧熊本大学ライティング&コミュニケーションラボ¹（2014～2015年度）、熊本保健科学大学のアカデミックスキルラボ（2017年度～）で学生指導員として大学1年生を中心としたライティング教育に携わってきた。学生指導員は、学生がレポート等の文章作成をする過程においてテーマ設定や論拠の検証、アウトライン作成、引用のチェック、推敲等を一緒に行う。学生に近い立場で一緒に考えていく中で、学生の困惑を肌で感じている。彼らは「（資料に）書いてある通りなんです、何を考えるんですか」「高校の試験では文章に書いてないことを書くと減点されるから、自分の意見なんて考えたら駄目でしたよ」と言うのである。稿者は、こうした学生の認識が他者の意見に対する疑問なき受容や根拠に基づかない直感的な否定を生んでいるという問題意識を持っている。

批判的な検証に対する学生の苦手意識は、自分の感想を羅列したしただけの、教員にとっては学生の理解の限界を知る以外に読む価値のない試験回答や「それっぽいこと」を当たり障りなく書いただけの講義要約レポート、目を通した資料の文言の一部を書き換えて上手く並び替えたような剽窃まがいのレポートに表れている。

一方、国文学演習Ⅴ（2017年度前期3年次開講科目）では、担当教員・跡上史郎により、学生が論文を書く力を身に付けることを最終的な目標としつつ、その前段階として卒業論文における「テーマ設定」に至る道を辿るという授業が企画されたが、これは宮本と問題意識を共有するものであった。本稿は、主に宮本の視点に立ち、教員の指導を受けながら学生の指導に関わる一大学院生の立場から、学生の他者の意見を批判的

に検証する力を育むための方法の一つを提示することを目的とする。また本授業は、受講生の実態を踏まえて課題を設定する形をとっているため、綿密な授業計画の通りに行う実践とは異なることを最初に断っておきたい。

授業では、国文学演習Ⅴの受講生24名を、くじによって4～5人からなる5つのグループに分けた。1班（男子2人女子3人）、2班（男子2人女子3人）3班（男子2人女子2人）4班（男子2人女子3人）5班（男子3人女子2人）とし、グループ活動はこの班で行った。分析対象はグループ発表の板書記録、それぞれの学習課題で使用したワークシートの記入内容、学生の提案を元に作成したパワーポイント資料とした。

授業の課題として、まずは可能な限り先入観を廃して、客観的にデータを読み取る力を身に付けるために、「坊っちゃん」（一）の最後の一文の解釈について根拠を挙げながら説明することを設定した。次に、他者が『坊っちゃん』を読み取った結果としてWikipediaの「坊っちゃん」²を取り上げ、その批判的な検証を通して、データを読み取る能力を向上させることを課題とした。論文のテーマ設定をするには、最終的に他者の書いた論文、先行研究を批判的に検証することが必要である。そこで、漱石研究の第一人者である小森陽一の論文³を検証の対象とし、これまでの演習で身に付けてきた『坊っちゃん』に関する知識を活用して「問い」を持つことを目標にした。

2. 「坊っちゃん」（一）の最終文

『坊っちゃん』は「親譲りの無鉄砲で小供の時から損ばかりしている」という有名な一文に始まる。坊っちゃんの幼少期が語られ、松山への赴任に伴い、清と別れて東京を旅立つ場面で終わる冒頭部分は中学校の

教科書に掲載されている。授業の導入として、東京書籍の『新しい国語 2』⁴に掲載されている「坊っちゃん」を読み、主人公の坊っちゃんの人物像を捉えることを課題とした。グループで坊っちゃんの人物像について話し合い、坊っちゃんの人物像を表すキーワードを3つ抽出した。なぜそのキーワードを選んだのかをグループごとに発表させた。「無鉄砲」は全ての班で共通し、あとは「負けず嫌い」「清から愛される」「流されやすい」といった要素が取り上げられた。

坊っちゃんの人物像をつかんだ段階で、「坊っちゃん」(一)のまとめとして以下の問いを提示した。まだ最後まで読んでいないところで、学生が問いに対してどのようなアプローチをするのかを明らかにするとともに、問いに答えるために何度も文章を読み返したり、グループで話し合ったりする姿勢を身に付けてもらうことが目的である。具体的には個人で答えを考え、後にグループで答えをすり合わせ、最後は理由や根拠も含めて班ごとに発表した。個人で答えた内容については、同じ回答が重複しないよう以下の表1にまとめた。

「汽車がよっぽど動き出してから、もう大丈夫だろうと思って、窓から首を出して、振り向いたら、やっぱり立っていた。何だか大変小さく見えた。」について

a: 何が「もう大丈夫」なのか?

b: 何が「やっぱり」と思ったのか?

c: 「何だか大変小さく見えた」のはなぜか?

表1. a. b. c. の答え

a	○もう清はいないだろうという「大丈夫」○自分がいなくても清は大丈夫だろう○自分はもう清からも誰からも独立することができた、と自分に言い聞かせている○今なら振り返っても涙が出ないと思っている
b	○まだ清が見送ってくれているということ○清にまだ居てほしいという願望があったが、それが現実だったので安心した○自分を過保護すぎるほどかわいがってくれた清ならまだこちらを見て立っていると予想していて、その予想が当たった
c	○清の腰が曲がっていたから○涙で目が潤んだから○清は悲しんでうつむいて縮んでいたから○清が自分と離れて悲しんでいることを距離感で表現している○今まで頼りにしていた大きな存在(清)が物理的にも心理的(存在感)にも遠く弱々しい存在になったから○愛情よりも主従関係が強くなり、心理的な距離感を感じたから○坊っちゃんの唯一の味方を小さくすることで、坊っちゃんの大変な将来を暗示している○自立したさから勝手に成長していると過信して自分が大きく見えている

aの答えはまず「大丈夫」なのが「坊っちゃん」か「清」で分かれる。「坊っちゃん」の場合、泣きそうな状態が少し冷静になり、泣かないだろうという安心感があるという意見が3つの班から出た。ここでは坊っちゃんの短絡的な「ちょっと離れば泣かないだろう」という判断を想定した発表もあった。「清」が大丈夫だとした場合では、2つの班が、坊っちゃんとの別れを寂しがっていた清の気持ちの整理がついたという意味で解釈した。作品の語り手が大人になって過去を振り返っているという視点から、自立に向かう坊っちゃんの覚悟の表れだと説明している班もあった。

bの答えは「やっぱり」を坊っちゃんにとって望ましい意味でとるか、望ましくない意味でとるかで分かれている。望ましい意味では、今まで可愛がってくれていた清に最後まで見ていてほしいという甘えや信頼があり、それが現実となった「やっぱり」である。一方望ましくない意味では、坊っちゃんが自立したいと思っているが、最後まで見守っている清の姿を予想して、清の世話焼きから脱出できないような窮屈さを感じた「やっぱり」である。ここでは、坊っちゃん本人が断つても清が半ば強引に荷物をつめている場面の記述を根拠に挙げていた。

cについては、大別すると物理的に小さく見えたのか、心理的な変化が清を小さく見せたという答えになった。班ごとの発表ではいずれも心理的な距離感が答えの中心となった。具体的には、坊っちゃんと離れる寂しさからうつむいてしまい、背を丸めたことで小さく見えた、清との精神的な距離感を「小さく」と表現することで強調している。物理的な距離が大きくなるにつれ、互いの存在の大きさを実感しており、寂しさや孤独の共感が清を小さく見せている、という解釈である。また、清の小さくなる様子を「弱々しさ」に結び付け、坊っちゃんの唯一の味方である清が小さくなることで坊っちゃんの大変な将来を暗示していると考えた班もあった。

以上を踏まえると、「坊っちゃん」(一)を読んだ段階で多くの学生が自分なりの解釈を理由に答えており、数人の学生が具体的な記述を示しながら答えている。今回の課題では具体的な記述を根拠として自分の考えを説明できることを目標としていたが、現段階では文章の内容を自分なりに理解することにとどまったといえる。ただ、「坊っちゃん」(一)だけでは、提示した問いに対する答えが十分に出せないことは、学生が指摘した「語り手が過去のことを振り返って書いてある」という気づきからも明らかである。そのため、自分の考えを支える根拠を持つという課題は次に引き継ぐ形で、今度は分析の範囲を広げ、作品全体を通して分析することが必要だろう。

3. ウィキペディアの改善点

Wikipedia とは、誰にでも編集可能な Web 上の百科事典である。アメリカの NPO ウィキメディア財団が運営しており、英語、日本語をはじめ、150 言語以上が使用可能である。分からない言葉を検索すると一番に表示されることもあり、幅広く利用されている。今回は「坊っちゃん」に関する「あらすじ」と「登場人物」の項目を取り上げ、より良い Wikipedia になるよう改善するという学習活動を行った。誰にでも編集できることを経験することと、これから学術論文を書く学生として引用する情報の選択に対する意識を高めることもこの教材を扱った一つのねらいである。

授業では、個人で改善すべき箇所を検討した後に具体的な改善案をグループで話し合い、班の提案という形で改善後の記述をまとめさせた。そして、班ごとに代表者が改善案を提案しディスカッションを経て改善すべきか、改善の内容はどうするか等を決定し、最後は実際に編集することとした。ディスカッションでは、東京書籍の『新しい国語 2』245 項～246 項に掲載されている反論の仕方について言及し、発表者の前提や根拠に注意しながら改善案を吟味することとした。学生の提案した改善点 20 点のうち、議論の中心が異なる以下の 3 点を取り上げながら、ディスカッションの内容を検討する。

- 「芸者遊びについて詰問するが、しらを切られたため業を煮やし」
- 「校長から辞令を渡されるが、辞令は帰京するときに海中投棄したことがここで語られ、坊っちゃんが少なくとも 1 回、帰京したことが読者に示唆される」
- 「夫人はかなりの情報通であり、坊っちゃんにマドンナ事件やうらなりの延岡転任の真相を教える」

まずは芸者遊びについて詰問するが、しらを切られたため坊っちゃんと山嵐が赤シャツを殴ったという記述について、殴ることは計画的だったという指摘である。根拠として本文中の「到底智慧比べで勝てる奴ではない。どうしても腕力でなくっちゃ駄目だ」「こっちのは天に代わって誅戮を加える夜遊びだ」が根拠に挙げられ、殴ることは計画的であったことに全員が納得する形となった。議論になったのは、修正後の具体的な文言である。赤シャツにかかる言葉が不自然にならないよう、言葉の順序を入れ替えて最終決定となった。ここでは提案者の指摘した内容への反論はなく、

実際に Wikipedia に掲載するときの書かれ方の検討が中心となっている。

一方 2 つ目の提案に関しては、反論もなく、かつ書かれ方についての変更もなく採用が決まった。坊っちゃんが教師として松山に赴任して一度帰京したという記述について、辞令は赤シャツを殴ってから東京に帰るときに投棄したととらえるべきであるということ全員が合意した。この改善案のようにすぐにディスカッションが終了するものは、学生がこれまでに受けてきた国語科の試験で出題される正誤問題に答えるような感覚で判断しやすい改善案であったといえる。

3 つ目に取り上げる改善案では、改善の必要性についての反論があり、最終的な文言についても議論が重ねられた。提案者は、「萩野夫妻」という登場人物について、夫人の記述に比べ、夫に関する記述が少ない点に注目した。本文に関する事実ではなく、Wikipedia での書かれ方に注目している。ここでは「記述の比重の平等」と「記述に値する内容」のどちらを優先させるかが最初の争点となった。改善案は爺さんの歌声のことを含めた記述であったが、「物語に影響を及ぼすような重要な内容ではないから爺さんの説明は必要ないのでは」という反論があった。作中において夫人はうらなりが転勤する本当の理由を坊っちゃんに伝え、結果として坊っちゃんは山嵐との関係改善や赤シャツの陰謀への不満を引き起こす役割を果たしている。この指摘については提案者も同意することとなり、今度は「萩野夫妻」ではなく「萩野夫人」とすべきではないかというアイデアも登場した。最終的には、下宿先の説明として「萩野夫妻」の項目にしておいて、その後に「特に夫人は」という文脈にすることにより、爺さんの存在を打ち消さない形で重要な情報を示すことで落ち着いた。

Wikipedia の改善という課題は、データを一つ一つ正確に検証できたという点で有効であったといえる。学生の提案に対して、「根拠は何ですか」「何ページの何行目ですか」といった、複数の学生が同じ文章に目を通し、確認するという作業そのものが、自分の伝えたいことを示すために何をどう説明すべきかの学びになっているのである。この過程では、特に「前提」に注意させたことで、データそのものの正誤に限らず、データから導かれた意見が妥当なものであるか、他者から見ても納得のできる文章かを学生同士のディスカッションの中で検討することができた。途中で議論が白熱して、言葉が荒くなった学生や対立する意見が平行線のまま着地点が見えなくなる時も見受けられた。複数の解釈をただ確認して受け入れるのではなく、どこまでが共通した解釈で、何が解釈を分けているのかを吟味する場であったといえる。

4. 学術論文の分析

Wikipedia の分析を通して、データを確認しながら自分の解釈に対して客観的にとらえ直すことができたが、最終的には学術論文を自分の解釈をすり合わせながら問いを立てなければならない。そこで、本授業における最後の課題として「東大教授と対話せよ」を設定した。Wikipedia の改善ではあらずじや登場人物について本文と照らし合わせることが中心であったため、書き手の意見に迫りながら「坊っちゃん」を再分析するという点において難易度が上がったことになる。具体的には小森の『矛盾としての坊っちゃん』を章の区切りで5分割し、1つの班で1つのまとまりを担当に振り分けた。担当班は30分間他の学生が質問する内容に対して答えることとし、事前に質問を予想して答えをワークシートにまとめさせた。また、質問する学生にも事前に質問する内容を考えてシートに記入するよう指示した。

このとき、問いの種類を学生に意識させることで、ディスカッションがより深められると考え、問いの種類を「単語レベル」「文・分脈レベル」「背景レベル」「その他」の4つに分類して考えてもらった。分類は、Wikipedia の改善で挙げた学生の指摘した項目を踏まえ教員が提示した。それぞれのレベルで想定している問いとして、以下のものを学生に具体例として示している。

単語レベル：「カルチュラル・スタディーズ」ってなんですか？

文・分脈レベル：～貢～行目の「実存は本質に先立つ」という言い回しの意味がわかりませんので教えてください。

背景レベル：山城屋については、どのような情報源がありますか。

また質問に答える学生には、小森陽一になったつもりで答えるために論文における根拠や背景も含めて調べておくよう伝えた。その際に学科の図書室にある『坊っちゃん事典』⁵、大学図書館の書籍や辞典コーナーの活用があればより良いということを伝えた上で、今回はネットの検索も認めた。ネット活用については、学生の負担を軽減しつつ、これから卒業論文の執筆に取り組む学生として、まずは意見のよりどころを意識させるための手立てである。質疑応答には、基本的に教員の介入はせず、議論の中で文学的背景が必要になった場合の補足や、議論が行き詰った場合のヒントの提示でのみ介入することとした。それぞれのレベル

ごとに、質疑応答で出た質問を以下の表2にまとめている。

表2. 各レベルの問い

単語レベル	○イデオロギーとは何か○創見の賜物とは何か○はすに切り込むとは○倅とは何か○六尺とはどのくらいか○質屋とは何か○人格的分裂とは○旗本とは何か○奇兵隊とは何か○薩長藩閥政治とは何か○秩禄処分とは何か○薩長藩閥政治とは○アナクロニズムとは何か○阻碍とは何か○メリトクラシーとは何か○街鉄とは何か○技手とは何か○解とは何か○15円83銭とはいくらくらいか○蟄居とは何か○茶代とは何か○スペンサー銃、スナイドル銃とは何か○お雇い外国人とは何か○白虎隊、彰義隊とは何か
文・文脈レベル	○同時代とあるが、いつ頃のことが○「栗」へのこだわりとはどういう意味か○男親と女親に対する親密度の度合いとは○父と同一化する欲望とはどういうことか○上への羨望は同じ価値体系の中の下であればあるほど強化される、とは
背景レベル	○人格的分裂と言えるような物語の背景はどこにあるのか○当時の質屋のランクはどのようなのか○ランクの差は分かるが、なぜ質屋が弱虫に結びつくのか○15年ぶりとはどういうことか○「表裏のある言葉」とはどのようなものか○山城屋とはどのようなものか○坊っちゃんと勘太郎の「栗」をめぐる争いはなぜ薩長藩閥政治に対する反発を象徴しているか○明治時代の公立・私立中学校とではどちらがいいのか
その他	○「(「おれ」は左利きだったのかもしれない!）」という記述は必要なのか

Wikipedia の文章に比べ、難解な言葉が多く登場していることが分かる。これらの言葉は、歴史的な出来事に関係する語句であったり、大学生が日常生活で目にしたことのない物の名前であったり、よく耳にする言葉ではあるが厳密には理解していないカタカナ語であったりする。ここで学生にとって重要なのは、分からない言葉をそのまま受け入れて文章を読むのではなく、一つ一つの言葉に立ち止まって文章を読むことである。またこの重要性は単に学生の語彙力を高めるという意味において述べているのではない。言葉の意味を逐一確認することは、書き手との対話をする以前に行われるべき、書き手への歩み寄りなのである。

質疑応答を通して言葉の意味を確認していくうちに、書き手が前提としている知識が少しずつ読み手の中に浸透する。例えば、「質屋」とは何かという問いから、「当時の質屋の社会的なランクは」という問いになり、明治期のイデオロギーの感覚に関心が向いている。さらにこれらの質問に関連して「なぜ質屋が弱

虫に結びつくのか」という問いが出された。幕藩制社会の差別意識をもとに展開された小森独自の視点に投げかけられたこの問いは、論文との対話の出発点といえよう。小森の主張を確認するところで質疑応答が終わったが、「坊っちゃんが単に無鉄砲で暴力的だからすぐに相手を弱虫だと述べているのでは」という反論に繋がるような問いも投げかけられたかもしれない。このような可能性を生んだのはやはり、言葉を丁寧に噛み砕く作業である。

5. 結論

最初の課題については、学生の意見の根拠が明確とは言えなかったが、まずは「坊っちゃん」(一)の最終文に対する問いに答えるための手がかりを持つということを意識させることができた。その手がかりは坊っちゃんの幼少期のエピソードや家族の関わり、清との関わりについてグループで共有した解釈等である。この段階で客観的な分析を行う前に必要な、自分なりの引っかかりを持ったといえる。自分の中で理解した坊っちゃんのイメージは、次の分析対象であるWikipediaの記述に対して違和感を持つことにつながる。そして最後の演習課題では、当初想定していた「論文のテーマ設定になりうる問い」には至らなかったものの、学生は他者の意見に対して問いを持つために必要な段階を丁寧に辿ることができた。丁寧な分析は、分からない言葉の一つ一つ理解しながら他者の意見を聞こうとする態度で示されている。

アカデミック・ライティングの手法を用いた『坊っちゃん』の分析を振り返ると、最初の学習活動では比較的読みやすい文学作品に触れ、解釈の違いをディスカッションで確認している。ここまでは中学校や高等学校の授業を受ける感覚で学生はグループ活動を楽しんでいる様子であった。次の学習課題はWikipediaの分析であったが、あらすじや登場人物に関する記述の修正は正誤問題を解くようなスタンスでできるため、最初の活動と同様、学生の負担は少ないようであった。しかし、修正案を一つずつ検証し、修正の必要性や訂正の範囲、細かい文言の検討をする段階になると表情が暗くなり、修正案ごとに立ち止まることに苦痛を感じている様子が見られた。Wikipediaの改善において

行われたような地道な確認作業は学生が経験する機会が少なかったといえる。この活動に授業日数の約半分を割いたことは、時間をかけてデータを検証し、自分の引っかかりを持つためのアンテナを張る意味を持つ。その結果、最終課題において「自分が分からないこと」への自覚や耐性が問いとして現れたといえる。少しでも疑問に思うことがあれば納得できるまで立ち止まって考える泥臭さが、主体的に何かを理解しようとする時の感覚として学生に伝わっていればよい。

本授業における最大の課題は、班で出たアイデアを全体で共有し、吟味する段階において「発言する人」と「発言する人」が明確に分かれた点である。グループ内のディスカッションでは意見を出せるが、全体でのやり取りとなると、「今の質問は何を答えたらよいのだろう」「誰かが言うのではないか」といった意識からか、多くの学生が聞き手役となった。これはチャルディーニ⁶の「集団的無知」のような、多数の人間が互いに何をすべきか分からない状況で起こる行動選択だったといえる。また、授業の前半で発言の機会が少なければ、「黙っている」という行為に対して一貫性を帯びてしまう性質を考慮すれば、全体で分析結果を共有する段階での工夫が必要だったといえる。

謝辞

本研究を実施するにあたり、ご協力いただきました学生の皆様に心から御礼申し上げます。

- 1 渡邊淳子「学部生指導員の活用によるグループ活動の試み：平成24年度ライティング指導室実践報告」(『大学教育年報』第16号、2013・3)
- 2 <URL:<https://ja.m.wikipedia.org/wiki/坊っちゃん>> 2017年9月28日現在
- 3 小森陽一「矛盾としての『坊っちゃん』」(『漱石研究』第12号、1999・10)
- 4 『新編 新しい国語 2』(東京書籍、2016・2)
- 5 佐藤裕子・増田裕美子・増満圭子・山口直孝編『「坊っちゃん」辞典』(勉誠出版、2014・10)
- 6 ロバート・B・チャルディーニ『影響力の武器 [第二版] —— なぜ、人は動かされるのか』(誠信書房、2007・9)